

高校中退者にとっての中学校経験—都立高校調査から—

○盛満弥生(宮崎大学)

古賀正義(中央大学)

1. 問題設定

高校中退率は近年低下傾向にあり、2012年度には1.5%と国際的に見ても低い水準となっている。一方で、高校教育がほぼ義務教育化され、大学進学率も50%を超える状況のなかで、高校非進学や高校中退によって中卒学歴にとどまることがその後の社会生活上のリスクにつながる可能性が増している。高校中退の背景のひとつとしても、家庭の社会経済的厳しさが挙げられており、中退による高卒学歴取得の失敗が貧困の世代間連鎖をもたらすことが懸念されている。格差・貧困問題が深刻化するなかで、中退の未然防止や中退後の支援を考えることは喫緊の課題であると言える。

高校中退はこれまで主に高校教育をめぐる課題としてとらえられ、高校教育制度の多様化や弾力化、個性化の推進、高校現場でのキャリア教育の充実や中学校との連携強化などが求められてきた。近年の中退研究では、単に高校教育のあり方だけでなく、生徒の家庭背景や社会状況に目を配る必要性も指摘されている(青砥2009、片山2008)が、学校教育に限定したとしても、高校中退は高校教育だけの課題ではなく、小・中学校からの課題の積み残しととらえる視点が必要である。

そこで本報告では、高校中退経験者に対する聞き取り調査データを用いて、高校入学までの状況、特に中学校段階における学校生活や進路選択に焦点を当て、中退者がいかなる中学校経験を有しやすいのか、そのことが進路選択や高校生活にどのような影響を与えているのかを検討する。

2. 調査の概要

本報告は、東京都教育委員会によって行われた「東京都立高校中途退学者等追跡調査」(以下「都立高校調査」)から、2010・2011年度に都立高校を中退した48名に対する聞き取り調査データを用いる。聞き取りは2012年9月～2013年1月に実施された。対象者の内訳は、男性26名・女性22名、16歳～26歳(平均18.5歳)となっている。高校1校目の退学時期については、72.9%(35名/48名)が1年時に退学しており、そのうち

57.1%(20名/35名)が1学期(4～8月)の時点で退学あるいは学校に通わない状況になっている。2年生以降で退学している場合でも、1年時から不登校傾向だったケースが3件ある。退学した高校が希望する学校や通学形態ではなかったというケースは多いものの、高校進学自体を望んでいなかったのは1ケースのみである。

3. 中学時代の生活状況

「都立高校調査」では、聞き取り調査に先立って、2010・2011年度の都立高校中途退学者及び2011年度都立高校進路未決定卒業者を対象にした質問紙調査が行われている。調査報告書(2013)によると、中退者は進路未決定者に比べ、①精神的課題を抱えるケースが多い、②規則正しい生活習慣が確立していない、③高校生活における友人関係をそれほど重視していない、④中学時代の出席状況が良好でない、といった傾向があることが指摘されている。また、中学時代の生活に関しては、出席状況だけでなく、成績が良好でなく、部活動への参加状況も芳しくなかったことが明らかになっている。

聞き取りのなかでも、精神的課題や不規則な生活習慣、中学時代の出席状況の悪さについて語られるケースが多かった。成績についての直接的な語りは少なかったものの、進路選択の際に「おまえは高校に行けない」と教師から言われたり、学力が足りず志望校を変更したケース等があった。

退学に至る理由は一様でないとはいえ、聞き取りのなかでは、「適応障害」「教室にいるのが苦手」「自分を出せない(出しすぎる)」といった精神面や人間関係上の課題と、「夜遊びしすぎた」「通学するのが面倒」「授業が楽しくない」といった非行・怠学傾向が退学のきっかけとして多く語られた。こうした課題・傾向は多くの場合、中学時代から続くものであった。精神的課題や人間関係を抱えるケースでは、1年生の早期の段階で退学に至っている。一方、非行・怠学傾向を示すケースでは、単位不足や出席日数不足により「進級できない」ことがきっかけとなり年度末に退学に至っ

ている。後者のケースでは、中学校生活への満足（「中学楽しすぎ」「先生と仲良し」「生徒の気持ち」がわかっている」「授業に笑いがあった」）がより多く語られ、高校進学・中退以降も中学時代の担任と頻りに連絡を取ったり中学校まで会いに行くなど、中学校時代の教師が重要な役回りを担っていた。

以下に典型的なインタビュー事例を2つ紹介しておく。

（i）精神的課題を抱えていたケース

Aさん（17歳男性）：1年生の7月に全日制普通科高校を退学し、現在は予備校で大学進学に向けて勉強中（高認取得済み）。高校志望理由は「近い」「制服がおしゃれ」。中学時代から人間関係に難しさを感じていた。「（高校に行かなくなった理由の）一番は、精神的な面で何か疲れていたというか、自分を殺してまで無理をしてたというところがありまして」「表面的な面では結構友だちが多かったかもしれないですけど、やっぱり内心では1人だった」「周りとは若干違う部分があると非常に違和感を感じる部分がありまして、周りの子たちが数学ができてから、やっぱり自分もできなきゃおかしいんじゃないのかなみたいな。なんかそれで1人仲間外れにされているような、変な被害妄想みたいなを感じた時もあった」。社会勉強だと思って始めたコンビニでのアルバイトを通して考え方に変化があり（「いろんな人がいるってことがわかった」「人に対する接し方がちょっと見えてきた」）、後先のことを考えられるようになった（「自分もほんとに高卒の資格は取っておく必要があるな」「結局、高認の資格取ったら、やっぱり進学の方がいいんじゃないかなと」）。中退をしたことに対して「今だとちょっと後悔している」「学校をやめるときが自分の今の心境だとしたらたぶんやめなかった」「自分が学校をやめたのは周りの環境のせいにするつもりは一切ない」と語る。将来は図書館司書や地方公務員を希望している。

（ii）怠学傾向を示すケース

Bさん（17歳男性）：1年生3月に全日制専門学科を退学し、現在はコンビニでアルバイトをしている。退学のきっかけは、学校が遠かったこと、「ずっと夜遊びばかりしてて、朝帰って、起きてようと思って結局寝て」「起きたら12時だみたいな」状態が続き、結果的に単位を落としたこと。1年生の2学期には進級できないことが決まっていたが、友人から「最後までいて」と言われ学年末まで在籍。高校の先生とは折り合いがあまり良くなかったが、中学の時の先生とは「フレンドリー」であり、「一番嫌いな子と3年間クラスが一緒」など「嫌なことは腐るほど」あったが、基本

的には楽しい中学時代を過ごした。勉強は「全然苦手」「しようと思えば良かった」。授業中に寝たことないが、「後ろ向いて喋ったりとか、携帯ずっといじくったりとか。隣の子にちょっかい出したりとか」。先生からは「めっちゃ」注意された。高校受験の際には、「おまえは高校に行けない」「どうせ落ちるよ」と言われていた。中2頃から塾通いをしてしたが、一度も宿題をやったことはない。高校へは「超行き直したい」「高1の最初に戻りたい」。再入学や高認取得については「高卒は欲しいとは思うんですけどね。何か高認取ればって言われたんですよ、担任に。でも、高認難しいって聞いたんで、無理だなと思ってやめました」と語る。鳶職の事務所を営む父親から仕事を継げと言われるが、本人の希望としては「鳶職は収入が安定しないというのがあるんで」「高卒取って、それこそハローワークとかそういう所行ったりして、収入が安定した仕事に就ければ一番いい」。

4. 考察

先述したように、中退経験者のほとんどは自ら望んで高校進学を果たしていた。それでも、その多くが入学早期の段階で学校を離れる結果となっており、背景には中学時代から克服されないまま積み残されている生活習慣や学習習慣、人間関係上の課題があった。こうした状況をふまえると、中学校での進路指導において進学へのモチベーションを高めたり、高校におけるキャリア教育を充実するだけでは支援が不十分と言える。

聞き取りのなかでは、朝が弱く、比較的近場の中学校まで遅刻せずに通うということが難しい状況にありながらも、通学に1～1時間半かかるような「遠い」高校を選択しているケースがかなりみられた。学力や内申で遠い学校しか選べない場合もあるだろうが、可能な範囲で通学時間の短い学校を選択するよう促すなど、中退を未然に防ぐための生徒の課題に応じた適切なサポートが求められる。また、進学に伴って環境が変わることで、通学状況が改善することも十分にありうるが、聞き取りのなかで語られた「人間関係上の課題」は環境が変わるだけでは克服が難しいものであり、本人たちも学校や教室環境の問題ではなく「自分の問題」としてとらえていた。アルバイトの経験や入学・編入の繰り返しのなかで、そういった課題を克服しつつあるという語りもいくつか見られたが、そういった経験が、高校入学前の段階、あるいは高校在学中に可能となるような支援体制の構築が求められる。

※詳細な分析結果および参考文献は当日資料をご参照ください。